

コミュニケーションを支える文法

コミュニカティブな文法のテストング

重松 靖

(東京都国分寺市立第三中学校)

1. はじめに

「文法とは？」と問われて咄嗟に答えることができないのは私だけだろうか。ODE で調べてみると、“syntax”, “morphology”, “phonology”, “semantics” など、学生時代に言語学の講義で耳にした用語で説明されている。つまり、『学習指導要領』で示されている「言語材料」、すなわち、「音声」「文字及び符号」「語、連語及び慣用表現」「文法事項」と解釈してよいようだ。しかし、「音声」や「文字及び符号」は、それだけを取り出して指導したり、テストしたりすることは少ない。本稿では、「語、連語及び慣用表現」「文法事項」に絞って考えてみたい。

2. 何をテストするのか

“Excuse me.” や “You’re welcome.” などの表現は、場面に応じて適切に使えればよいものであり、中学の段階では読めたり、書けたりできなくても構わない。一方、“Sincerely.” や “Please write me soon.” など、手紙で用いられる語彙や表現はきちんと読め、書けるようになってほしい。

文法事項についても、例えば三単現の s を落としたとしても情報の伝達という意味では支障はないが、“This is an animal.” と伝えたいのに、“This animal is.” と言ったのでは相手は困惑するだけである。

後置修飾を含め、「語順」と「時制」は日本語と英語では大きく異なり、生徒にとってはやっかいなものである。しかし、これらを誤ると正しく意味を伝えることは難しくなる。ていねいに繰り返し指導するとともに、適切に評価することが大切である。

このように、「語彙」や「文法事項」はその意味や

働きに応じ、どこまで指導し、どのようにテストしたらよいかを十分に吟味する必要がある。生徒に余計な負担や混乱を与えてはならない。

3. どのように評価するのか

(ア) テスティングポイントを明確に示す

テストは、指導者にとって、指導した内容の定着度を知り、以後の指導に生かすためのもの、生徒にとっては、学習した内容の理解度を知り、以後の学習に生かすためのものでなければならない。そのためには、大問ごとに何を測ろうとしているかというテストングポイントを明確に示す必要がある。テストングポイントも、【文法：現在完了の意味】などと、できるだけ具体的にすべきである。

(イ) 場面を明示する

文法のテストをよりコミュニカティブにするためには、提示する英文がどういう場面で使われているのかを示し、コミュニケーションを意識させる必要がある。東京都中学校英語教育研究会のコミュニケーションテストにおける語彙問題が、「ある場面において、適切な語彙の運用ができるか」を目的にしているのもこのためである。

例えば、疑問詞 “what” という語彙をテストしたいとする。最も簡単な方法は、「次の日本語を英語に直しなさい」等である。しかし、これでは、誰がどういう場面で発するのが分からない。

1つの方法としては、対話文にすることである。そうすることで、context が明らかになり、場面をイメージできるようになる。ただし、テストングポイントは、【語彙：“what”】なので、reading の要素をできるだけ排除するため、対話をワンターンとし、英文も平易にする必要がある。

【例1】

次の英文の()に入る語として最も適するものを

①～④の中から選び、番号で答えなさい。

A: Nancy, can I ask you a question?

B: Sure. () is it?

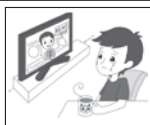
① How ② When ③ What ④ Who

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より)

イラストを用いることも効果的である。

【例2】

次の絵を説明する英文になるよう()に適する語を入れなさい。



My brother watched the news on TV last night. It made him ().

① happy ② sad ③ angry ④ sleepy

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より改題)

(ウ)形式よりも意味

- ・ 同じ内容になるよう適語を入れよ。
 { He is so young that he can't drive a car.
 { He is () young () drive a car.
- ・ 次の()内の語を適する形に直せ。
 The bus has just (leave).

これらは、多くの人が一度は目にしたことがある問題ではないだろうか。「ルール」さえ知っていれば、so / that / can't や has just が目に入った途端に too ~ to ..., 過去分詞 left が頭に浮かぶ。「誰が何をした」など、英文の意味は関係ない。コミュニケーションとは無縁の、言語の形式や機械的な操作の問題である。「ルール」を覚えることも必要ではあるが、コミュニケーション的な文法のテストでは、言語の形式が持つ「意味」をテストすべきである。例えば、現在完了形の次の問題を見てみよう。

【例3】

絵の吹き出しに入る英文として最も適するものを①～④の中から選び、その番号で答えなさい。



Oh, no! The bus

- ① leaves.
- ② is going to leave.
- ③ was leaving.
- ④ has just left.

(平成21年度東京都都中英研「コミュニケーションテスト」より)

言語の形式からすれば、選択肢①～④は、文法上すべて正しい英文である。しかし、それぞれの英文の意味と示された場面を考えると、正答は④になる。場面を明らかにし、英文の意味をじっくり考えさせ

るように、問題を工夫したい。

(エ)4技能を通しての文法のテスト

これまでは、主に定期テストにおける【言語の知識・理解】という観点からのテストについて考えてみた。しかし、文法はコミュニケーションを支えるものであり4技能を通して文法力を測ることも当然できる。

例えば、「あなたは外国人の友だち Mike に旅先から絵のはがきを送ることにしました。自分で旅行先を決め、場所の紹介や旅先での経験などを3文書きなさい」という課題で「書く力」を評価するとき、「文法の正確さ」という観点を設ける。

「話すこと」では、提示された英語の音声を繰り返して発話させることを通して、短時間に正しい文を組み立てる力を測ることができる(平成17年文部科学省「特定の課題に関する調査(話すこと)」より)。この活動では、次のような工夫をすれば、よりコミュニケーション的なものになる。

- ・ 主語を you に替えて繰り返す

テストポイント【現在完了形】

教師: I have been to Kyoto many times.

生徒: You have been to Kyoto many times.

- ・ I know / I don't know を加えて繰り返す

テストポイント【比較】

教師: Koji is the tallest in this class.

生徒: I know Koji is the tallest in this class.

「聞くこと」「読むこと」においても、ターゲットとする文法事項の意味を正しく理解していなければ正答を得られない小問を設けることにより、文法力を測定することができる。

4. おわりに

「語彙」や「文法事項」のテストを、すべてコミュニケーションにすることは難しい。しかし、指導と評価は表裏一体である。コミュニケーションを意識した指導をするならば、テストもよりコミュニケーション的なものにしたいものである。

【参考】

根岸雅史, 東京都中学校英語教育研究会(編著)(2007)『コミュニケーション・テストへの挑戦』三省堂
 東京都中学校英語教育研究会「コミュニケーションテスト」